伊藤痴遊全集

第四巻

昭和四年九月十日印刷
昭和四年九月十五日發行

伊藤痴遊全集　第四卷

著者　伊藤仁太郎
發行者　下中彌三郎　東京市麹町區下六番町一〇
印刷者　濤川薫　東京市麹町區下六番町一〇

發行所　東京市麹町區下六番町一〇　振替東京二九六三九番　株式會社　平凡社
電話九段三三一六六四七五番

村田製本　共同印刷株式會社印行

（第七回配本）

第四卷　大久保利通　目次

島津家の始祖（一―一三）……三
島津家中興の英主（一―七）……四
重豪と齊宣（一―一五）……五
秩父崩れの眞相（一―一九）……九
齊興の襲封（一―七）……一四
榮翁と笑左衞門（一―八）……一七
齊興とお由良の方（一―一一）……二〇
お由良の陰謀（一―八）……二五
齊興と齊彬の不和（一―七）……二七
奸黨の呪詛（一―一七）……二九
密貿易の發覺（一―一九）……三九

齊彬派の潰滅(一—九)……四〇九
大久保家の慘憺(一—九)……四三九
黑田侯の斡旋(一—八)……四六六
齊興の退隱(一—八)……四九一
齊彬の襲封(一—一〇)……五一六
久光暗殺の密謀(一—六)……五四一
齊彬の病死(一—六)……五五九
安政疑獄と西鄉(一—六)……五七六
大久保の舞臺(一—五)……五九四
王政復古の前後(一—一〇)……六一〇
明治の大久保(一—三)……六二四
大久保の終焉……六三一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

大久保利通

島津家の始祖

一

西郷隆盛が、偉大なる人物である、といふ事は、既に定評があつて、今更に諄々しくいふ必要はないが、然らば、何ういふ所が、西郷の偉大なる點であるか、といふ一段になると、大概な人は、ハツキリ答へ得ない。其ハツキリ答へ得ない所が、西郷の偉大なる所以である、と言へば、言へるのだらうが、人間の偉い偉くないは、紙一枚ほどの差ひで、何事か、初まつた時分に、其人の智慧が働いて、非常に人に感動を與へると、その時に『彼の人は偉い』とか、『何といふ馬鹿な奴だ』とかいふ樣な、批評が下つて、是が幾度か、繰返されて居る中に、其人物の價値は、定まつて了ふものなのだ。

處が、西郷ほどに、偉大な人物になると、殆んど然うした、批評を、爲る隙もない位で、或時は馬鹿のやう、又或時は、測り知る事の出來ないほど悧巧な、どうして此樣に、一つ人物でありながら、區別がつかないか、と思ふ位に、相違がある。

乍併、其馬鹿のやうな所は、つまり平生に於ける、小さい問題に就てゞあつて、どう間違つた所で、天下國家に關係はないのだが、苟も天下の大問題となれば、全く其平生のやりくちと違つて、ズバ抜けて、偉い所を見せる。其處で、西郷は、何れ程に、偉い人であるか、更に解らない、と、いふやうな事に、なつて了つたのであらう。大きな

問題に打付つても、一般の人のやうに、顏を赤くしたり、蒼くしたり、七顚八倒の苦みで、他の見る眼に、哀れな醜態を現はさない、といふ所に、西郷の特色はあつた。其代り、普通の人がやつて、誰にでも出來るやうな、些末な事柄に就ては、甚だ間の抜けた事をしては、人の笑ひ話に上る事が、屢々あつた、と、傳へられて居る。

明治四年の時、英吉利のパークスが、西郷を訪れた時に、珍談がある。其時分、西郷の住宅は、青山の今の英和學校のある隣地で、此頃行つて見れば、人家が立ち竝んで賑かになつて居るから、殆んど何の邊であつたか、判らない位であるが、未だ其頃には、見渡す限りの原や畑地で、非常に淋しい所であつた。大きな百姓家を借りて、住んで居た所へ、パークスが、訪ねて來て、いくら大きな聲で吐鳴つても、一向返辭がなく、廣々とした家の中に、人影が更に見えない。パークスは、不思議に思ひ乍ら、歸らうとした時、家の背後の方に、人が居るやうな氣がしたから、家について、横道の方から、廻つて見ると、約千坪位あらうといふ庭、といふよりは、原といつた方が、可い位な、草の蓬々と生えた空地があつた。其隅の方で、西郷は、例の藤摩絣の着物を着て、尻ッ端折に頬被りをして、草を刈つて居る。夫れを見たから、パークスは聲をかけて、ズツと進んで行くと、漸く西郷も、夫れと知つたものか、ニヤリと笑ひながら、パークスの方へ、ツカ〳〵と寄つて來て、

『ヤア、こや、能うおいで、ごわした』

と言ひながら、大きな手を出した。パークスも、笑ひながら握手しよう、として、手を出したが、慌て其手を引込ました。見れば、西郷は、今草刈をして居たまゝの、泥だらけな手を出して居た。

斯うした事は、誰にでも判つて居る事で、何でもないやうな事だが、西郷は、外國人に握手の禮をするといふ、事だけは、人からも教へられ、又人の爲るのも、見て居たから、判つて居たけれど、洗つて出す、といふ事は、教へられて居なかつたから、然まで不都合な事でもない、と、思つて居たのだらう。流石のパークスも、是には聊か閉口した、と見えて、倫敦へ歸つてから、日本の陸軍大將は、斯ういふ質素な、生活をして居る、といふ事を、タイムス新

聞の記者に話をしたので、夫が新聞記事となつて、一時は交際社會で、却々評判の話題になつた。或皮肉な人は、日本の陸軍大將に面會するには、手袋の掛替を、持つて行かなければならぬ、などゝいつて、此樣事から、西郷の名は、存外に、英吉利の上流社會に、知れ渡つた、といふ事がある。

只是だけの事を見ると、西郷が、馬鹿な人のやうだけれど、サア彌よ天下に、大事件が起つて、自分が、其局に當らなければならぬ、といふ場合になると、快刀亂麻を斷つの、手腕を揮つて、大きな問題を、片付けて行く。さうした所に、西郷の偉い所が、現はれて來るのだ。

西郷に比べると、木戸と、大久保は、どうしても一枚下るやうだ。是程の人物になれば、一々例をあげて、どの點が、優つて居るとか、劣つて居るとか、いふやうな、批評も出來ないが、概して西郷は、人物としては、二人よりも、大きい點がある、といふ事は、別に議論をしないでも、萬人が見て、皆然うと思ふのであるから、著者が、西郷を以て、三傑中の第一人と、いふた所で、大して苦情は、出まいと思ふ。

木戸と大久保を、西郷から離して、對照して見ると、之は何方が、偉いとも言ひかねる。各自一長一短があつて、木戸の偉い所もあれば、大久保の優つた所もある。此二人は、同じ位の人と見るのが、公平な批評であらう。大久保といふ人は、大體から見て漸進主義の人物で、果斷には富んで居たが、激しい改革を加へて、直ぐに新しいものにして行く、といふやうな事になると、充分に考へてからでないと、容易に手を着けなかつたので、どうかすると、進歩的の政治家でないやうにも、批評されて居る。木戸は、其點になると、極めて進んだ考へを、有つて居た人で、同時に、其の考へた事を發表して、實現させる事に努める、といふ氣風があつた。其處が、大久保と木戸の相違のある點で、明治四年に洋行して、歸つて來て後は、此二人が、仲が惡くなつて、遂には木戸の方が、力負けをして、天下の事は、大久保の手に依つて、料理されるやうにはなつたけれど、木戸が、裏面の人として、若し大久保に、甚く反抗して行けば、大久保の方でも、非常にやり難いやうな傾きがあつて、自然と、其の感情が、疎隔して行くに從つて、

例の薩長軋轢の熱が、高くなつて來た。尤も、薩長の軋轢は、夫から初まつたのではないが、此二人の感情が、互に惡くなるに從つて、軋轢の度も增して來た、といふ順序に、なつて居たのである。

木戸が、非常に進んだ考へを、有つて居た、といふ證據には、岩倉大使に從いて、洋行した時分、伊藤博文と、福地源一郎に申付けて、西洋各國の國會と、憲法の內容を調査しろ、といふ事を命じた、といふ一事に就て、考へて見ても、其時分に、其處まで、進んだ考へを、有つて居た人は、木戸の外に多くなかつたらう、と思ふ。國會が開けた今日に、なつて見れば、何でもないやうだけれど、明治四年の當時に、木戸が、日本の將來は、國會を開くの他はない、といふ考へを以て、其調査にかゝつた、といふ點から見た丈でも、木戸が、進步的の政治家であつた、といふ一例にはなる。

斯ういふ風に、比べて來ると、如何にも、大久保が三人の中で、一番下つた人物のやうだが、決して然ういふ譯ではない。是は只だ、木戸の大久保に優れて居た所を、擧げたのであつて、同時に、大久保の方が、木戸より優れて居た、といふ點も、是と同じやうに、澤山あるのだ。夫を總勘定して、さて差引いて見ると、何方にも優劣はない、といふ事になる。

其處で、大久保の一生は、年齡の上からいへば、左樣大して長いものではなかつたが、最も活動したのが、維新の舞臺であつた丈に、話すべき材料も、澤山にある。夫を一々細かに話して行くと、隨分長くもなるが、大久保の爲人や、家柄に就ての話をする前に、どうしても、島津家の先祖が、どういふ人であつて、其家の起つたのは、どういふ事情からか、といふ事も、述べて置かなければならぬ。

一一

今では、何樣な子供でも、直に東鄕元帥とか、乃木大將とか、いふやうな人の名を口にして、軍人の眞似をしては、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

日を送つて居るが、僕等が育つた時分、即ち寺小屋が、今の小學校に移る時分には、未だ昔の風が、大分遺つて居て、どんな子供について、聞いて見ても、汝の一番好きなのは何だ、といへば、義經か清正を、第一に擧げたものだ。子供の頭腦の中に、加藤清正と、源義經の名前が、深く染み込んで居た事は、非常にえらいものであつた。一枚の凧を買つても、其似顔は、義經か清正であつた。第一に、武者の繪といへば、緋縅の鎧を着た、義經に極つて居た、といふやうに、義經が、子供の間に於ける、人望は大したものであつた。夫から續いては、義經の兄の頼朝である。義經は軍人として、子供に喜ばれたが、大勢集まつて、戰さ事をする時分は、大將といへば頼朝と、定つて居て、大概な子供は、自分が、頼朝を氣取つて、紙の張子で出來た、冠のやうな物を被つて、お山の大將を、氣取つて居たものである。陣頭に進んで、働く者は義經で、陣中で威張つて居るのは、頼朝であるやうに、誰が教へたか、自然と、定つて居たのだ。其頼朝が、一度覇府を、鎌倉に建て、茲に武家の天下は開けたのであるが、學者といふ立場から批評したならば、頼朝に就ても、いろ〳〵非難をする點はあるだらうが、兎に角、伊豆の小島から起つて、武家の天下を開いた、といふ點だけから、考へて見れば、頼朝は、實に偉いものだ。其偉いものだといふ證據には、今、鎌倉へ行つて見ると、鶴ケ岡八幡の社内に、其の時代の樣々の寶物が、一般に縱覽を、許されて居る。僕など、一遍見に行つたが、其案内するものが、寶物に就て、一々來歷を、述べて行く中に、

『これに供へましたる髑髏は、源頼朝公が、十三歳の時のものでございます』

といつたやうな事を言つて、案内をして居た。此頃では、是丈は止めたさうだけれど、頼朝の死んだのは、ずツと年を老つてからであるのに、鶴ケ岡八幡の寶物の中には、十三歳の髑髏がある位だから、頼朝は、世間の人と異つて、掛巷の髑髏も、持つて居たのだ。此の一事から考へても、頼朝が、普通の人でない、といふ事が分るだらう。併し、那の大きな頭の掛巷は、容易になかつたらうが、僕の考へる所では、其掛巷の髑髏が、桂太郎になつたのではなからうか、物も間違ふ位なら、其位に間違つた方が、面白からうと思ふ。

此樣に、偉い賴朝でも、女にかけては、實に意氣地がなかつた。殊に、妻君の政子には、一生、頭が擧らずに終つたのだから、面白い。那の大きな頭が、擧らぬ位に、押へ付けて居た、政子の力は大したものだ。賴朝が落魄して、北條家の食客に、なつて居た時に、そッと通じたのが、北條の娘の政子であつて、是に就つては、いろ／＼な傳說がある。

自分の家は、平家の爲に滅され、母の懷ろに抱かれて、甚い苦勞をした事もあつたが、二三の人の情によつて、蛭ケ子島へ、流されて來た、といふやうな、身の上で、今北條に見離さるれば、其日から食ふ事に、困るやうな身分であつたが、流石に、武家天下の基礎を、拓くだけの大器量人賴朝は、然うした苦しい間にも、世話をしてくれる人の娘を口說かう、といふ餘裕があつた。尤も、此の一事は、さまでに、餘裕のない人でも、隨分盛んに發展するのだから、それがあつたから、賴朝が偉い、とはいへないけれども、先づ日本の助平大將といへば、賴朝であると、直に人の口の端にかゝるのは、全く斯ういふ事があつたからだ。傳說に依れば、賴朝が、本當に戀して居たのは、政子ではなく、その妹の方であつた。所が、其戀文の使をした家來が、半間な奴で、誤つて、姉の政子へ手渡しをした。政子が、披いて見ると、賴朝からの色文であつて、どう讀んで見ても、自分へ來たものではない。一時は、嫉妬の焰が燃えて、父に告げよう、と思つたが、併し、考へて見ると、今でこそ家の食客とはなつて居るが、其素性を洗へば、源家の嫡流であつて、其爲人も、誠に立派で、何所となく、悧巧さうに見える。何れ一度は、世の中に出る事もあるだらう、といふ所に、女ながらも政子が、目をつけたのであつた。其所に、政子の偉い所はあるのだが、まだ男の肌を知らぬ、娘育ちの政子が、早くも思案を定めて、其戀文が、間違つて來たのを幸ひに、自分が、賴朝の情婦にならう、といふ事を、考へついたのだから、いよ／＼以て、面白い。

其所で、政子は、私かに、返事を書いて、賴朝に送つた。待構へて居た、戀人からの手紙であるから、賴朝は、取る手遲しと、披いて見ると、自分が、想つて居るよりは、先方の方の熱が高いやうな、手紙の文句に、賴朝は、頸筋

元から、水を浴びせられたやうに、ゾク〳〵して、其嬉しさは一通りでない。手紙の中に、書いてある時刻に、そツと忍んで、行つて見ると、驚いた。妹娘と思つたのに、然うではなくて、自分の嫌ひな政子であつたから、其ビツクリは一通りでなかつた。

『ヤツ、お前は、政子か』

と、言ひながら、飛出さうとするのを、シツカリ押へて、

『どうぞ、行末永く、お見捨のないやうに、お願ひ申します』

と、開き直つて、言はれた時は、流石の頼朝も、大きな頭を、ポリ〳〵掻きながら、何とも答へが出なかつた、といふ事だ。

乍併、縁は不思議なもので、嫌やだ〳〵と思つて居た、政子が、何日か、頼朝の氣に入つて、終には政子よりも、頼朝の方の熱が高くなる、といふやうな譯で、毎夜の媾曳が度重なつて、父の時政に見付けられて、到頭大騒ぎになつたが、たとへ食客とはいへ、頼朝も、源家の嫡流であるし、娘の政子は可愛し、痛し痒しの間に挾つた、時政は、ツク〳〵考へて見たが、モウ其の時分には、平家の力も、漸く衰へて、何日か此時勢が、一變する位の考へは、時政も、有つて居た。其上に、京洛は知らず、關東の方へ來れば、どうしても、源氏の關係者が多いのであるから、さういふ所から、考へて見て、可愛い娘の政子の婿として、誠に結構なものである、といふ考へを以て、二人の不義を許して、正式に婚にした。此事については、政子が、熱心に、父に說いた、といふ點も、與つて力があつた。さうなつて見ると、婦人ながらも政子は、有繋に偉い所があつた。頼朝が、妹娘に戀をして居たのを横取りして、自分の所有にして、了つた爲めに、政子は、後に右大臣兼征夷大將軍の夫人と、なつたのであるから、今の藝者が、華族の夫人に、なつた位のものとは、却々比較のとれない程に、政子は、辣腕な婦人であつた、ともいへる譯だ。

二

其内に、頼朝の武運が、開けて來て、源家に、由縁のある者を、狩集めるといふ段になると、夫に就て、北條の一門は、非常な骨折であつたが、頼朝の兄弟にも、却々偉い連中があり、義經、範頼を始め、いづれも素晴しく戰爭に巧手な人々であつた。斯うした弟を、持つて居た、頼朝は仕合せであつた。同時に、源家の武運は、是等の兄弟の力によつて、初めて開ける事になつたのだ。其順序を、いふて居れば、長くなるばかりで、本傳には、餘り關係のない事だから言はないが、兎に角、頼朝を中心として、その左右へ、集まつて來た連中が、非常な働きをして、長い月日こそかゝつたが、平家を滅して、源家の天下にして了つた。其處で、頼朝は、征夷大將軍となつて、覇府を、鎌倉に開き、素晴しい勢ひとなつた。此時に、問注所の長をして居たのが、大江廣元といふ人で、此の人の子孫が、今の毛利家である。

天下の大權を握つたので頼朝は、自分の思つた事は、何でも遂げ得られる、といふほどに、大層なものになつて了つたのだが、何事にも自由の利かぬ、食客の身分でさへも、其家の娘の所へ、這込む位に、女好きの頼朝が、天下の事、一として成らざるなし、といふ位置に上つた以上、女の事位に、不自由を忍んで居る筈はない。天下も、既に定つて、幕府の基礎が、堅くなつて來ると、その遊樂心は、益々盛んになつて來て、彼の女此の女と、苟も自分から、是はと思ふ女があれば、直ぐに手に入れて樂む、といふ事に、なつて來た。然うなつて來ると、性氣の深い、政子が承知しない。初めの内は、頼朝に向つて、嚴ましく吠え立てると、頼朝は、五月蠅く思つて、程よく扱らうて居たが、終ひには狂人のやうになつて、頼朝に、食つて掛つて、犬も食はないといふ、夫婦喧嘩の、絶える間がなかつた。

『お前さんは、全體、誰の庇蔭で、今日のやうな身分になつたのですか。清盛さんに憎まれて、伊豆の小島へ、流されて來た時分に、妾の父が、お前さんを救はなければ、誰一人として、お前さんを、救つたものはないのです。夫

を今になつて、女狂ひをするとは、どういふもんですか、又那の晩の事を、考へて御覽なさい。妾の他には、女猫も抱かない、と、仰しやつたではありませんか』

と、いつたやうな事を、盛んに囀つて、頼朝を困らせる。果は、向ふ脛へ喰付いたり、頰邊に、爪の痕をつける事も、幾度かあつたらう、と想像される。其樣此樣で、頼朝も終ひには、五月蠅くなつて、成可く政子の方へ近寄らぬやうにする。ところが、元來、女好の頼朝であるから、漸次、政子を疎んじて、離れるやうになつて來ると、どうしても、代りの女が、必要になつて來る。其處で、政子の恪氣が、甚くなるに從つて、頼朝の女狂ひは、進んで行く譯になるのだ。

政子の方では、良人の頼朝が、斯ういふ風に女好きであるから、少しも油斷はしない。自分の左右に、使つて居る女は、成可く縹緻の惡いのを集めて、どうしても、頼朝が、手を出せないやうな事にしてゐたが、夫でも、頼朝は、キヨロ〳〵眼で、探して歩くから、政子の側に、附いて居る女は、縹緻が惡くても、世間に歩いてる女が、縹緻が美ければ、其方へ眼がつくから、同じ事だ。到頭比企能員の娘を見て竊に想ひを寄せる事になつた。だん〳〵人傳を以て、是を手に入れようとすると、能員は、此相談を、餘り喜ばなかつたが、娘は、矢張り女に有勝の、虛榮心が強く、父の能員を出拔いて、頼朝の聘に、應ずる事になつた。女の虛榮心の強い、といふ事は、昔も、今も、變りはないものと見えて、是に能く似た話は、澤山ある。何しろ、源家の嫡流で、永い間、平家に握られて居た、天下の政權を、取戻した上に、武家天下の基礎を開いた、といふ、其偉い所を見ては、如何に女でも、慕はしく思つたに違ひない。殊には、征夷大將軍の愛妾となれば、僅な領地に、ヘバリ付いて、威張つて居る、地頭位の妻君になるよりは、遙かに優であるから、よし妾であつても、頼朝の所有になつた方が、榮耀榮華は、思ふ儘だ。殊には、政子が、長い間の頼朝との關係ではあるが、まだ子供がないから、若し都合好く、自分に、子供が生れば、天下の相續人になるのだ、といふやうな、慾の心も手傳ふて、其處で、父能員を出拔いて、頼朝の言ふ事を、肯く事に、なつて了つた。

政子が鼻について、嫌になつて居る矢先に、絶世の美人と、評判の高かつた、能員の娘が、自分の愛妾になつたのであるから、頼朝の喜びは一通りでない。假令、政子が、何と言はうとも構はぬ、といふ、大い熱度で、頼朝は、直ぐに是を、殿中へ引入れる事にした。是が有名な、丹波の局といふのである。

さあ、斯うなつて見ると、政子も、默つては居ない。漸次、嚴ましくなつて來て、頻に苦情を鳴らすが、頼朝の方で、成可く、奥御殿へ、近付かないやうにして、明けても、暮れても、丹波の局の部屋にばかり、へバリ付いて居る、といふやうな譯で、何日か、局は、頼朝の胤を宿して、見る物を見ない、といふ事になつたから、頼朝が、局に對する愛は、益々深くなるばかりであつた。

此事が何時しか、政子の耳に入つたから、今までの悋氣は、大切な良人と、睦じさうに一つ寢をする、夫が口惜い、といふだけの事であつたけれど、今度は、自分の腹に、子が無いのに、局の方には、早くも子が出來た、といへば、若し夫が男の子であつた日には、此家は、自分のものでない事に、なつて了ふのだ。是は由々しき一大事だ、といふので、夫からは、丹波の局に對する嫉妬は、一段と激しくなつて來た。果は、是を亡き者にしよう、といふやうな考へさへも、起るやうになつて來た。悋氣は、女の慎む所、疝氣は、男の苦しむ所と、昔の落語家が、能く言つたが、全く夫であつて、女の悋氣は、狐色の間が價値があるのだ。餘り燒過ぎて黑焦になると、此位ゐ厄介なものはない。

比企能員は、眞面目な武士であつたから、初め頼朝から、人を以て、娘の相談が、あつた時分には、程能く挨拶をして、夫れを避けるやうにして居たのが、其内に、娘の方から進んで、出來合つて了つたのだから、然うなつた上は、仕方がない、といふので、娘は、朝頼へ、捧げる事にして了つたのだ。けれども、彌よ然うなつて見ると、能員にしても、左樣悪い氣はしない。といふものは、頼朝の愛妾なのであるから、人の羨む割合に、自分の誇りにもなつて、慾の上から言へば、自分の家の爲にもなるのであるから、初めは嚴しくいふたやうなものゝ、今では、娘の功を、誇り顔に、人にも語るやうになつて來たのだ。ところが、娘は姙娠して、頼朝の胤を宿した、といふのであるから、益々

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.